

<書評論文>

家と「ディアスポラ」

—— 植民地下移民女性のライフヒストリー ——

Jackie J. Kim,
*Hidden Treasures: Lives of First-Generation Korean
 Women in Japan*
 (Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2005)

片 田 晶

はじめに

本書はコリアン・アメリカン二世である著者が在日朝鮮人の渡日世代である一世女性らに行った聞き取りの中から10人のライフヒストリーを収めたものである。女性たちは1910年から1926年の間に生まれ、先に日本に渡った男性と結婚する新婦として、また未婚の女性労働者として、帝国の都市に移住した。彼女たちの過去は、在日朝鮮人すなわち植民地支配下の移住（colonial migration）を起源とする集団について、これまで光をあてられなかった物語、そしてその独自の光を発する物語——“隠されていた宝物”として提示される。

10章に渡る語りは女性たちの日本語と朝鮮語の混成の語りを著者が文字で書かれた英語へ再構成したものであり、今回それをさらに日本語で紹介することになる。しかし、在日朝鮮人における政治運動・社会運動の歴史に男性中心的性質がはっきり指摘できるにも関わらず、その植民地経験、国家、民族アイデンティティなどをめぐる正統の言説についてジェンダーの観点から検証した研究は少なく、ごく最近を除けば、本書イントロダクションの著者、朝鮮大学校卒業後、渡英し、人類学者となった在日二世の女性研究者ソニア・リャンによるもの、すなわち英語圏の研究しかほぼ存在しなかったことがある。

リャンによれば、本書の功績は女性たちの幾重にも沈黙させられた過去を発掘することにより、エスニック集団の正統の歴史が覆い隠してきた在日ディアスポラにおける女性の

経験、とりわけ彼女達が抑圧され、同時にそれと格闘し、創造しようとしてきた家・家族の姿を提示したことにある。海外の移民研究・エスニシティ研究では、エスニック集団がしばしば要請する「民族の母」としての役割とは裏腹に、現実の移民女性は一家の働き手として真っ先にホスト社会への適応を要求され、多重の矛盾に対処しなくてはならない点が指摘されてきたが、本書はその独特かつ顕著な事例を示したと言える。例えば、以下のようにリャンが表現する女性たちの「変容」(transformation)過程は、日本での生活を究極的には暫定的で非本来的な境遇と位置づけ、定住生活の本質を民族性の危機として描くような正統の反「同化」論的言説と矛盾してしまうものと考えられる。このように本書はジェンダーの観点から、主流の言説において周辺化されてきた主題のなかに集団の日本社会への適応、参与、ひいては家族の生存の過程までもが挙げられうることを示唆している。

これらの女性は現代日本と朝鮮の激動の時代に参与し、身体的、心理的、地理的、そして文化的な移転を経験した。これらの女性たちは自身を幾重にも変容させた：ひとつは被植民者からディアスポラの主体へ、さらには若く無知な処女の花嫁から独立独行の女性家長へ。それぞれの転換は危険を伴い、決断と苦痛を要求し、女性たちがジェンダー、コロニアル、エスニック、社会文化的権力関係の多層構造と格闘する過程であった。しかし、これらの転換の多くはまた自己実現、充足、達成をも伴い、ときには勝利と喜びにも彩られていた。(Kim[2005:xiii])

以下では、1節で本書に歴史的背景と考察の枠組みを与えようとしたリャンのイントロダクションを紹介し、2節で著者による序文から本文の概略や調査環境等に触れた後、3節では、本文から、特に女性たちの労働と家庭内の権力関係の2つの観点から語りを取り上げ、最後に4節で女性たちの個人史の提示において著者が重視した語りに注目し、本書の意義と今後の課題を考察する。

1. 二重のディアスポラ——もうひとつの植民地下移民経験

本書のライフヒストリーに歴史的背景を提供したリャンのイントロダクションは、在日朝鮮人コミュニティの歴史にとってジェンダー間の差異が持つ特別の重要性を、女性たちの二重の離散の生の形態として表現する。リャンは長い間男性作家たちによって占有されてきた在日文学作品において、朝鮮半島の統一や在日朝鮮人の「祖国」への帰還などのテーマに典型的に特徴付けられる「在外国民の政治」の支配的影響力を指摘する。これらの作品が描く在日家族の疎外と抑圧の物語には日本での生活の暫定的本質という視点が浸透

しており、また男性支配的観点が明白であった。こうした文学の状況に象徴されるように、現実の在日社会の権力関係においても、女性の生活の領域は厳しく沈黙させられてきたという。その重要な事例として、リャンは自身の研究に言及しながら、強制連行の歴史を集団の全面的で真正な「植民地過去」としてきた正統のナショナリスティックな言説が、非常に効果的にそれ以外の「植民地的過去」、とりわけ女性の過去を覆い隠してきたことを指摘する。帝国本土に渡航した女性たちが経験した数々の周縁的労働や移住家族の経験は些細な、あるいは恥ずべき過去として集団の「植民地過去」の外側へ追いやられてきた。

このように、リャンは在日朝鮮女性のオーラルヒストリーが持つ独自の領域を強調して、「ディアスポラにおける家（home）の概念」へ読者の注目を求める。伝統的な朝鮮の婚姻システムによって夫の家ではしばしば余所者として遇され、相続権がなく、また息子を出産するまで「居場所がない」と言われた朝鮮女性たちは、さらに「内地」への移住によって出生の家からも切断された。日本で成人しながら終生日本語を読み書きできず、11人の子を育てたが夫の家でさながら雑役婦のように扱われ、死後は朝鮮の夫の家系の墓の傍に埋められたという自身の祖母を引き合いに出すリャンは、朝鮮女性が経験した家の中にも外にも「居場所のない」状態を強調している。

研究者たちはディアスポラの経験が男性と女性にとって異なる影響をもたらす方法に既にいくらか注目してきたが、日本における朝鮮女性の場合には、ディアスポラは彼女たちの家の内側での地位のなさ（statelessness）の中に埋め込まれている。それゆえ、親族システムが彼女たちの家庭内の位置をさえ周縁化する方法は、日本社会の朝鮮人に対する当初の植民地主義構造と現在の民族差別が五、六十年のディアスポラの生を経た後も彼女たちの存在論的不安定性を状況付ける方法と緊密に関連付けられなくてはならない。（Kim[2005:xxv]）

そのうえで、リャンは、ときに宗教的信仰や政治的ビジョンに力を得つつ、経済的、社会的、また家庭における絶え間ない格闘を通じて家（home）を創り出そうとし、家の内外で無数の課題に対処してきた本書の女性たちの奮闘に注目する。これら多重の周縁に立たされた女性たちの植民地下の移住、民族差別、エスニック集団内の権力関係に関する語りは、個人の経験と、政治的でナショナルかつディアスポリックな経験とが織り成す複雑な過去の探求を可能にするものである。以上がリャンによる本書の提示である。

2. 「隠された宝物を探して」

本書の女性たちは、調査当時で72歳から89歳までの年齢層であり、在住地は新潟、川崎、

大阪である。ごく一部の女性を除いて調査当時も日本語も朝鮮語も読み書きのできない女性がほとんどである。著者は序章において、女性を取り巻く在日社会の状況に関して、紹介を頼んだ在日男性たちが一様に価値ある在日朝鮮人研究と「無知・無学な」女性たちの「無駄話」とを結びつけることに困難を示したことを紹介した後、実際には非常に活き活きと貴重な歴史を開示したインフォーマントたちとの偶然の出会いなどを述べる。インタビューでは、たいてい著者が渡米に至る著者の母の苦境についての身の上話を共有した後、改めて女性たち自身の若い頃や渡日の経緯を尋ね、当人さえも語ろうとは思えないような遠い過去の物語を求めたという。ある女性が具体的な経験についてほぼ何も語らず、タバコの吸殻とため息だけが積み重なった「失敗」の聞き取りの中で、著者は女性が繰り返し口にした「私の運命 (*p'alcha*) 」という言葉——「私はあの船にのったのが間違い。だけどあんな幼い歳で親もとを離れるのが私の *p'alcha* (運命) だったから。」(Kim[2005:xxxii]) のように——から、女性たちの物語に対する重要な洞察を得たとしている。女性たちは自身が強いられる様々な *Kosaeng* (「苦生」= 苦勞あるいは苦難の人生というほどの意味) に対し、それが *p'alcha* (漢字では「八字」= 誕生時に定められた運命、八卦) であったという説明を多用した。

私の母親はどんなに苦しんでもね、そんな恨み言はおくびにも出さなかったよ。お母さんは自分の気持ちを誰にも、私にだって言わなかった。かわりに言ったのは、単に、今起こっていることや起こったことはその人の運命の本に既に書いてあったものだって。その人に授けられた運命 (*Tako nan p'alcha*) だって。(Kim[2005:91])

著者によれば、「運命や運勢に関する文化的定義によって、彼女たちの苦境と格闘を合理化する方法」であるこのような語りは、「苦境は乗り越えられるべきであるという信念」を力の一つの源泉として、犠牲を払い苦境を生き抜いてきた女性たちが、そうした経験を正当化し、またときに生存者としての自負を表現する枠組みでもあるという。著者は本書を女性たちの語りとして提示する自身の役割と狙いについて多くを述べていないが、本書で明示的に選択されているパースペクティブは在日女性たちの経験を一つの移民女性の格闘として提示するものである。上述のリャンが指摘したように、それは従来の在日研究の蓄積に対して、一定の角度からの根本的な問い直しを迫るものであったが、こうした本書の意義と課題については後に再度考察したい。

それぞれが10頁から20頁に及ぶ女性たちの語りは各々10前後の節のもとに編成されている。すべての章に共通する節は「子ども時代」「家族」「結婚」「渡日」「夫」「労働」「子どもたち」「回顧」などであり、それぞれに異なる女性の出身階層や地域性を現すテーマと

して「両班として育って」「教育」「海女」などの節が、また来日後の経歴によって「戦火」「焼けた広島を歩き通して」「帰国」「密造酒をつくって」「再婚」「親愛なる金日成將軍」「総連」「宗教」「北朝鮮に行った娘」などがある。節編成と繰り返しを最小限に抑えた以外は、語りの組み立てと言葉は語り手たち自身のものだという。

3. 植民地下移民女性たちの苦境

貧困の克服と経済的機会を求めて帝国本土へ流れ込む人々に含まれていた本書の女性たちは、敵対的な社会の底辺に参与し、家の内と外両方で多くの困難と格闘することになった。この節では、(1) 女性たちの労働、(2) 夫婦間の権力関係や家庭内暴力に関する語りを一部紹介する。

(1) 女性たちの労働

全ての章には必ず「労働」の項目が設けられているように、多くの場合、彼女達は日本での朝鮮人一家の主要な稼ぎ手であり、時には夫の実家と自身の実家の両方を含めた大家族の家計を担った場合もあった。女性たちの故郷での労働形態には地域差があり、特に当時済州島では既に海女の他地域への出稼ぎが一般的になり始めていたのに対し、慶州道などでは女性が野外で働くことに否定的な文化的慣習が残存していた。しかし、いずれの場合も朝鮮人の単純肉体労働者として、「内地」の社会・経済システムに参入した経験には日本語の会話・読み書き能力の欠如のため、また「ものを知らないせい」で辛酸を舐めた体験や朝鮮人差別への当惑や怒りなどをはじめ、多くの困難が語られている。同時にまた多くの労働の語りにはときに女性たちの自負も滲む。

先に日本に渡っていた夫との結婚で渡日した「田中キミ子」は、1939年3月の結婚式の翌日、顔を見たばかりの夫とその母とともに17歳で日本に渡った。「その頃朝鮮はとても貧しい国で、世間じゃ日本に行けば地面にお金落ちてるようなもんだって噂してた。」故郷の馬山から釜山一下関の船旅の経た後、名古屋で電車賃が底をついたが、運良く朝鮮人に出会い借金をして長野に辿りつく。日本では着物が着られると言われていたので、彼女が頭の上に乗せて運んだ荷の中に衣類は二着の朝鮮式の服だけであったが、実際その後彼女はこの二着で三年間過ごしたようなものだった。夫とその弟家族の家に着いてみると、弟が賭博で負けて家の家具、食料が総ざらいされたところで、弟の妻は途方にくれていた。夫婦は新調した夫の服など売れる物を売って食料などに換えた。

私は夫の借金を払って過ごしたようなもの。そりゃ結婚初日にもう始まってね、結婚した時に、

あの人は借金をしてまともなスーツを作ることにしたの。あれが始まりだったと思うね。(中略) だからさ、日本に着いたときには夫は裸だったみたいなのだよ。だってもし借金が払えなかったら、着ているものを脱いでく破目になるんだから。(Kim[2005:55])

その後夫婦は各地を転々とし、彼女は多くの賃労働や商売を手がけて、主要な稼ぎ手として働くが、多くの仕事で自身が優れた働き手として評判を得ていたことを語っている。

仕事をもらうために列に並んでいると、現場監督の中には私の体格が小さすぎるって、選んでくれない人がいたけど、実際選ばれたときはね、いつだって私のことを褒めたもんだよ。市役所からの仕事で、道路を舗装したりセメントを入れたりなんかの仕事をして、道路の土砂を拾う仕事もした。私はいつも、決まった量を割り当てられると、自分のところをすぐに終わらせて、一度家に帰って他の仕事をして、後でお金を受け取りに戻った。その仕事は一日二百円で、ただの二百円だけど、それが毎日稼げるところが嬉しかった。豚の足を売ったりもしてね。(Kim[2005:59])

一度木の塊を小さく切る工場で働いたこともあったわ。(中略) 自分の持ち場の近くに上の娘を箱に入れて寝かした。他の人が私が子どもを世話しながら作業して同じだけもらうのは間違いだって言ったら、現場監督が、「この人はあんたたちの二倍仕事してる。あんたたちが一回木を取りに行く間にこの人は二回行ってる。この人に払いすぎじゃなくて、そっちに払いすぎだよ。」って言ったよ。あはは…(Kim[2005:58])

彼女が40歳の時、夫が亡くなって以後は養豚業を始めて家の借金を払い終え、子育ても終えた。養豚業の頃は夜中に寝返りをうつ母豚が子豚を潰さないように、子どもを置いて豚小屋で寝なくてはならなかった生活を語っている。この田中キミ子も「ある仕事で5時間かかる場合に朝鮮人はそれを一時間で全てやってしまうって日本人たちが言ったもんだよ」と述べているが、優れた働き手としての達成や評判に言及する女性たちは多い。そのような特別の「評判」によって、女性たちは雇用差別の回避や子育てとの両立を可能にしたという。女性たちが従事した労働は、ボロ拾い、鉄屑拾い、石鹼作り、焼肉店、パチンコ店、養豚、朝鮮人労働者の宿舎(飯場)、濁酒作り、闇買い、工場でのライン、土木工事などである。密造酒で拘留された際の不安な体験については3人の女性が回想している。

(2) 夫婦間の権力関係、家庭内暴力

このように女性の多くは一家の主な稼ぎであったが、一家の経済的な決定権は夫にあり、夫たちは妻の収入を結局は実りのない事業への投資や博打、飲酒等に用いて、家計を逼迫させる例が少なくない。夫に学歴がある場合に商売を势力的に担って主要な稼ぎ手となっている例もないことはないが、例えば田中キミ子が夫の飲酒や賭博について「当時は男の

仕事がなかったから」と説明するように、男性たちは周辺の労働で家計を支えることに問題を抱えていたと考えられる。以下は近所の少女たちとともに14歳で未婚の女工として渡日した安田キミ子の語りである。

夫は一人息子だったからとても甘やかされてた。夫の言うことを聞くしかしょうがない。でも持ってるお金を全部あげたら、どうやって子どもを食べさせる？ 私たちみんな飢えちゃう。「俺に渡すか、これを喰らうか」とくると、殴られるしかないわけ。(中略) 子どもたちは、父親の声を聞いて、酒を飲んでるってわかったら、押入れの中か、家の外に走り出てどこかに隠れたわ。夏はまだいいけど、冬の間は、本当にかわいそうでね。(中略) 夫は酒で有名で、川崎で飲兵衛ヤスと言ったらみんなわかったんだよ。姓が安田だから、飲兵衛ヤスで通ってた。…家の外では、みんなが良いやつだって言った。知らない人は「飲兵衛ヤス、あいつは本当に良いやつだ」って。けども、家に帰ってきたとたん、人が変わったみたいにね。(Kim[2005:102])

結婚は彼女の姉の夫の兄の仲人によって「身内の仲人なら間違いないだろうと」考えて決められたのだったが、夫は「遊びまわることでは一番」で、下っ端のヤクザにもなり、結婚当初は「何もものを知らなかった」彼女は義父の稼ぎを夫に渡してしまったりした。やがて彼女は濁酒作りを経てから焼肉店経営で一家を支えるようになる。また上記の田中キミ子も夫の飲酒と暴力について語るが、田中はまた「親に似た」息子による家庭内暴力に非常に悩まされてきたことも婉曲に告白している。本書の女性たちには、息子に関しては困難な家族関係や息子の人生に対する懸念を表明する一方、娘に関しては「私がくぐってきたものを本当にわかってくれる」などと母の人生に関する娘たちの連带的関係に言及するなど、対比的に語るケースも多い。

女性たちが周辺的、不安定な労働の中で徐々に日本語を覚え、技術を身につけ、詐欺にかからなくなり、「どうかこうか帳尻を合わせること」ができるようになっていく過程は在日朝鮮人家族の生活を可能にした女性たちの重要な適応の過程(transformation)だっただろう。そうした女性たちはまたしばしば夫の暴力や浪費にも対処しなくてはならなかった。しかし、家庭内の権力関係の中での苦闘に関しては、労働の語りとは対比的に、「普通ならば逃げ出すのが自然なほどの状況で私はなぜ逃げ出さなかったのか」と自問するような女性たちの語りや夫の晩年に関する語りが表すのは、自負というよりは様々な含みのある感慨である。

4. 在日女性たちの苦境と著者による提示

女性たち自身の「回顧」の節を中心に、女性たちの多くはときに2節で言及した

Kosaeng（苦勞、苦痛）や*p'alcha*（運命）という言葉を用いて、またときに「古い時代の人間だから」、あるいは日本に生きる朝鮮出身者であるからと説明しながら、自身の苦境にあつての奮闘を理由付け、その奮闘に対する自尊心や積極的評価を滲ませている。無論、このような語りを引き出した著者は、自身が「運命」という言葉を鍵として提示した、苦境を「合理化」するというこの枠組みに対して、単に樂觀視するものではない。多数の聞き取りの中で「きら星」である十篇を本書に収録したという著者が、「失敗のインタビュー」の例で紹介しているように、苦境を「運命」とする語りは語ることすら不可能な厳しすぎる経験を生きた女性たちのレトリックでもあった。

また著者はこのような語りに在日朝鮮人の文化的な独自性を強調するのでもない。著者は本書の語りを移民女性として無数の困難に直面し、「生きることの深みを生き抜いた」女性たちの声として表象し、在日朝鮮人一世女性たちの物語を多くの移民女性の経験と連続するものとして位置づけた。「彼女達の生が照射するのは、苦痛、達成、孤立について、家族のそして共同体の連帯の断絶と形成について、ぶつかり合う伝統について、そして社会的、政治的、文化的挑戦に直面しての粘り強さについてである。」（Kim[2005:ix]）そして、このような著者のアプローチこそが、日本定住化を強制連行に端を発する非本来的過程として位置づける従来の歴史的語りによって覆い隠される過去、一世女性が担った適応の過程や在日朝鮮人家族の領域を照らし出したのである。

ここで注意を払うべきは、著者による解釈枠組みの選択自体よりも、本書が「隠されていた宝物」として示す女性たちの過去が従来の在日朝鮮人史や在日研究の蓄積に対してどのように有効に接合されるべきかが著者自身においては論議されない点である。その作業はリャンによるイントロダクションに委ねられている。しかし、リャンは本書においても自身の著作においても、在日女性たちが経験し、それと格闘した抑圧について、例えばその朝鮮在住女性との差異など、他集団との比較においてその輪郭を検証することはしていない。在日女性たちが自身の家内においてさえ「難民」に喩えうるとして、家に埋め込まれたディアスポラという概念を示したリャンにとって、「ディアスポラ」の概念は「居場所のなさ」（あるいは在日一世の語りを扱うリャン自身の著作では「ふるさとの喪失」（2005））を核としているが、そのリャンにおいて、「ディアスポラ」と表現される構造的苦境に対し、本書の女性たちの変容や達成が何を意味するものであるのかといった問題は論じられない。植民地下「移民」生活という挑戦において女性たちが朝鮮人移民家族の中に位置を占めながら日本社会で生きるすべを切り拓いた過程を押し出した著者自身の提示は、必ずしもこのような「ディアスポラ」（＝本質的な「居場所のなさ」）の概念を導くものではないと考えられる。女性たち、ひいては在日朝鮮人という存在の解釈をめぐり、本

文とイントロダクションの間に微妙な食い違いが指摘できる。

おわりに

移民家族の妻・嫁・母としての女性の経験に注目した本書は確かに、在日朝鮮人女性に特徴的であった日常的抑圧の形態を指摘することに成功した。彼女たちは植民地出身であるために様々な資源に欠け、植民者の社会において被差別の位置にある少数者であった。またその苦境にあって、朝鮮の女性であるために一家の生計と生活に関する多すぎる責任を担うことになり、家庭内の資源配分や意思決定においては抑圧されていた。これらは相乗的に効果し、凝集的な苦境あるいは*Kosaeng*の経験となった。

このような経験を女性たちの「運命」とした歴史的社会的構造に関して、特に戦後においては日本社会・日本政府のポストコロニアル状況、そしてリャンも指摘するように在日朝鮮人運動がたどった歴史的展開などをめぐって、多くのマクロ的要因と多数の行為者が存在した。女性たちの「沈黙」に接近した本書はこうした構造の中を生きた彼女たちの経験自体に光を当て、新たな課題を明らかにしたが、その構造的状況が多層的な経路で個々の生を規定し、また逆に個人や集団の側から構造的状況への対応が模索される過程についてその全体像を把握することは試みられていない。

今後の課題として、在日一世女性たちの経験を隣接する他集団の女性達の経験から峻別すべき諸領域について、また逆にその密接な連関を要求する諸領域について更に明らかにすること、そして、その在日女性達の過去によって再構成されるべき在日家族の実相を同様に明らかにすること、これらを通じて在日女性たちに結果した「沈黙」について更に多角的に探求すること、最終的には人々の生活世界の領域とマクロ的構造の連関の実相と可能性について在日朝鮮人研究の観点から有効な提示を試みるものが挙げられるのではないだろうか。既存の研究の問題性を浮き彫りにしながら、本書が照らし出した多くのテーマは、集団の歴史と未来に関する支配的な語りと数世代に渡るエスニック集団の再生産の足元にあった現実であった。これらの過去をめぐる過程を更に追究することはポストコロニアル、ディアスポラとエスニシティ、そしてジェンダーの多層的な構造への一つの重要な接近とも言える。

参考文献

ソニア・リャン、2005、『コリアン・ディアスポラ——在日朝鮮人とアイデンティティ』明石書店

金栄・梁澄子、1988、『海を渡った朝鮮人海女——房総のチャムスを尋ねて』新宿書房

(かただ あき・修士課程)